



■■■今号のおもな記事■■■

- ・教養講座要旨
- ・研究室の窓から
- ・エッセイ
- ・クラス会だより
- ・戸山キャンパス近況
- ・催し物予定

教養講座要旨

「発達障害」のいま
:臨床の現場から
—「心の理論」から「社会脳」へ—
<新しい典型>像のご紹介を含めて

東京都台東区松が谷福祉会館
こども療育室

富田真紀
文学部 1974年卒



当時は、「発達障害」の早期療育(2歳台頃から始まる最早期)の都内の現場で、とくに最近の10年位にどんな変化が生じているかを、やや概論的に報告しました。この「抄録」では、単に概論を繰り返すより、ポイントを絞って論議を深め、さらに当日には触れられなかつた、最近の発達障害の<新しい典型>像についても触れたいと思います。

* * *

まず早稲田で「発達障害」を語るとなると、故・戸川行男教授の業績に触れない訳にいきませんでした。先駆的な著書『特異児童』(1940)によって、今日なら「発達障害」とされるであろう昭和の国民的ヒーローの一人・山下清(1922-1971)を発掘・紹介しました。その後、その生涯は、連続テレビドラマ『裸の大将放浪記』(1980-97)ともなり、現代の日本人の愛すべき「発達障害者」像の理解の源泉となりました。「臨床の早稲田」心理学の伝統のまさに底力を示します。

1. 「発達障害」臨床の現場はいま…

「発達障害」に関する理解と関心は、この約10年間に急速に広がりました。「発達障害者支援法」の施行(2005)は、自治体の「発達障害」支援施策の後押しとなり、それは「早期療育」の現場を、行政の「日陰者」から「脚光を浴びる」立場へと一変させました。この10年間に、どこの自治体でも処遇人数は激増(当区の場合は約2倍)しているのは、その現れの一つです。保育園の「待機児童問題」のように、華々しく政治問題化はしませんが、問題の深刻さは同じです。

ここまで変化があつても、「発達障害」の早期療育の現場は、その当事者以外には、今なおペールに包まれた「知られざる世界」であることに変わりありません。それは、保健所等の母子保健の現場でなされるスクリーニングに始まり、その後の治療教育プログラムの提供・実践へと続きます。その間には、単なる診断・評価だけでなく、保護者との合意形成や地域社会での最適のプログラム編成や企画などの複雑な心理学的プロセスがあります。その一端を、当日のお話より少し内容的に踏み込んでご紹介します。

2. 療育プログラムの実際

当所の早期療育プログラムの最大の強みは、地域社会に根づき、地域内の発達障害の「一部の」集団ではなく、就学前の発達障害の「全体」を対象としたプログラム編成ができます。それにより、その全体集団にとって最適の、最もきめ細かなプログラム提供が可能となります。

当所では、Parten(1932)による、幼児期の遊びの社会的側面のレベル分け(並行・連合・協同遊び)を取り入れて、グループ編成の目安としています。最初の「並行段階」では、子ども同士の交流要素はなくとも成り立つ性格のグループ活動の経験を重ねます。最終目的とする「協同段階」では、子ども同士の相談による表現や合意形成などを中心内容とします。そして、両者をつなぐ役割と位置づけの「連合段階」では、自発的交流の前段階となる形式に頼った交流体験を進めます。多くの子どもは、幼児期の3~4年をかけて、この3段階を一步ずつ進んでいきます。

この各段階では、子ども同士の直接・間接的な相互交渉の確実化を図っていくのは当然ですが、いくつかの共通した強調点(第一~第三)があります。

「連合」期の場面設定



第一は、基本的にゲーム仕立ての課題設定により、できるだけ早期からの「勝ち負け」(ないし「当り外れ」)体験の受け入れを図ります。これは、子どもとはいえ人生は、成功・失敗を伴う社会的ゲームの連續だという認識に基づきます。この自然な社会的ゲームへの自発的な参入力の育成は、当所の指導プログラムの中心テーマの一つです。

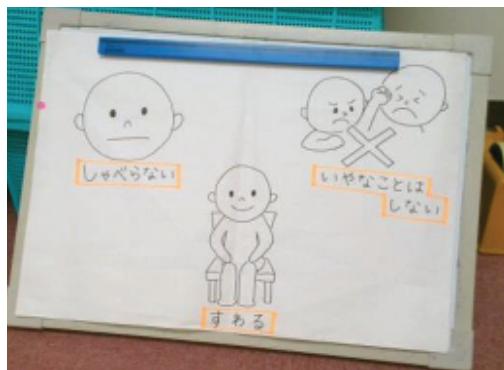
第二は、一般に発達障害(とくに自閉症圏)では不得意とされる、現実とは離れた空想(物語)世界の中で自由に遊べる(演じられる)能力の育成は、当所の指導プログラムの“必須科目”(とくに「並行」～「連合」段階)の一つです。それに抵抗を示す子もいれば、一般児と同じように、大きな興味・関心を示す子どもも多く、それが過半を占めます。

こうした「劇的遊び」によるプログラム内容は、ともすれば単なる劇の練習(教え込み)のように誤解されやすいですが、似て非なるものです。それはむしろ、「物語の枠組みに中での自由さ」という表象的表現力の強化を目的としたアプローチです。

第三には、さまざまな課題活動の進行に際しては、当然のことながら子どもの逸脱的な反応も伴います。しかし、そうした予測される混乱こそがまさに指導のチャンスとなります。それに対して、自己コントロール力を発揮する前提となる自己認識力の基盤の強化が必要となります。そのため、良いことも悪いことも含めて、その日の自分の活動を振り返ることが、やはり必須のプログラムとなります(とくに「連合」～「協同」段階)。

以上のような課題活動に共通する特性は、表象的表現や理解力(意味あるものの理解や表現)、そしてその社会的応用力をターゲットとしていることです。

その最も基本レベル(「並行」段階)の課題の実例をご紹介したいと思います。ここでは、その構成要素(①～⑥)すべてが非言語レベルでの表象的表現や理解を標的としています。



◎課題<なにができるかな?>の構成要素

- ① 名前を呼ばれて、前に出る (A・B・C)
- ② 友だちと一緒にカゴを運ぶ (A・B・C)
- ③ コースに沿って進む (A・B・C)
- ④ パズルを構成する (A・B・C)
- ⑤ 席に戻る (A・B・C)
- ⑥ 見る・待つ様子 (A・B・C)

要素①では、呼名に応じて「前に出る」という行為が一つの表象的表現(自己表現)となっています。初期の発達障害児には、それ自体に大きな抵抗が生じることが多々あります。要素②には、「並行」段階でありながら、「連合」段階的な要素がすでに含まれます(担架式の持ち方により、二人で小さなカゴを運ぶ)。

要素③は、二人の協力関係の持続の意思の表象的表現を含みます。要素④は、この活動の目標であり、パズルの配置により、二人の協力関係(=意味表出)のレベルを操作できます。

要素⑤⑥は、集団場面の理解と参加の意思表明の表出に関わります。直接の活動である要素②③④はできても、より基本的要素である①や⑤⑥が自律的にはできないケースは珍しくありません。そこに、発達障害の指導の独特な難しさがあります。それを初期の非言語レベルのうちに脱しておかねば、将来的にも永くその状態を引きずることになります。

「連合」や「協同」段階の課題にもそれぞれの段階の重要性がありますが、ここでは最も基本的な「並行」段階の課題説明に止めます。講座の当日は、最後にUCLAのC.カサリらによる早期療育プログラムJASPERを紹介し、それとの多くの共通性に触れました。

3. 発達障害の<新しい典型>像

当日は触れられませんでしたが、ここでは早期療育の最前線の現場で姿を現し始めた、<新しい典型>像についてご紹介したいと思います。(この考え方は、2016年2月に行われた保健所の「発達相談」スタッフによる、年1回の連絡会で初公表しました)。次のような、旧来イメージとは異なる状態像を示します。

【1】運動発達の大幅な遅れ: 旧来の古典的イメージでは、子どもは早くから激しく動き回っていました。ところが最近は、0歳台でハイハイ、1歳台の独歩などが大きく遅れる「動かない発達障害児」が増えています(精査を受けても原因不明。2歳までには歩く)。

【2】表面上の「言葉の遅れ」を伴わない: 旧来は、「言葉の遅れ」が最大の主訴でした。ところが最近は、(少なくとも表面上の)「言葉の遅れ」を伴わない(または早期に追いつく)ケースが増えています。

【3】対人反応が強く、ごっこ遊びを好む: 旧来は、対人反応は弱くて、ごっこ遊びはできないことが発達障害の中心イメージでした。ところが、それが逆転し、対人反応は強くて(むしろ「こだわり」の対象となる)、ごっこ遊びを好んで行います(それで場面ややりとり関係を仕切ろうとする傾向があります)。

研究室の窓から

デンマークとノーマリゼーション

柴田良一
文学部 1973年卒



コペンハーゲン大学聴覚言語センターの研究室、
私の前にあるのはパソコンでなく電動タイプライター
(やはり昔です)

【4】1歳半、3歳児の健診は通過していく：旧来は、保健所の健診を通じた紹介ケースが殆んどでした。しかし最近は、上述の理由で健診は通過して、3歳台以降の問題で紹介されるケースが増えています。

こうした事例は、従来型発達障害の典型例(ASD、AD/HDなど)とは異なる経過や状態像を示し、むしろこれまで周辺的な存在だった、トゥレット障害や場面緘默などの特性を示すことが多くあります。

旧来型のイメージに捕われて、こうした近年の臨床現場における、「典型的状態像」の変化について知らねば、その遭遇を誤る恐れがあります。それはまた、高次表象と運動レベルの障害の発達過程での併存という、興味ある心理学的テーマをも提起します。

(2016年11月26日)

教養講座(富田真紀氏)参加者アンケート

1.性別

	件数	%
男性	11	37%
女性	16	53%
無回答	3	10%
総計	30	100%

2.年齢

	件数	%
20代以下	13	43%
30代	5	17%
40代	5	17%
50代	2	7%
60代	2	7%
70代以上	3	10%
計	30	100%

3.職業

	件数	%
学生	13	43%
会社員	2	7%
公務員	1	3%
自営業・自由業	3	10%
教員	4	13%
主婦	3	10%
無職	1	3%
その他	3	10%
計	30	100%

4.満足度

	件数	%
満足	12	40%
やや満足	12	40%
やや不満	1	3%
不満	1	3%
無回答	4	13%
計	30	100%

(回答数30)

満足度の理由

満足度が高い人は孫・弟が発達障害である、自身が発達障害に関わる業務を行っている人が多かった。また、満足が高かった理由について、「具体的な事例を多く聞けた」というものが多かった。

今後希望する講座

大人の発達障害について聞きたいという参加者が多かった。

1970年代から80年代は日本から北欧の先進福祉を視察しようという方々が多くデンマークにやってきました。その中の一人、当時ハイデルベルグで研究生活を送っていた中園康夫氏(後の四国学院大学学長)がおられました。デンマークを訪れた際、同じ心理学を専攻していると言うことで千葉忠夫氏(日欧文化交流学院院長、現北フュン国民高等学校)から紹介されて出会ったのが、中園先生との出会いでした。中園先生はデンマークでのノーマリゼーションや統合教育に興味を持たれ、その後度々デンマークを訪れるようになり、小生も同学の後輩ということで先生のお手伝いをすることになりました。社会事業省や文部省を何度も行き来するようになりました。特に社会福祉局のN.E.Bank=mikkelsenの直属の部下であるElith Berg氏には、小生の研究の協力までして頂きました。ここでの経験が小生の福祉観に大きな影響を与えたのではないかと今更ながらに感じています。特にベルク氏には、当時日本では未だあまり知られていない学習障害の大会がドイツであるから一緒に行こうと誘ってくれましたが、当時学習障害についてあまり興味がなかった私はその誘いを断つてしまい、後年大変後悔しました。

福祉に関心のある方はノーマリゼーションでなくノーマライゼーションではないかと指摘されるかもしれません。私は中園先生やデンマークの知見をベースにしていますのでノーマリゼーションとあえて使います。この思想はバンク=ミッケルセンを中心として発展してきたと言うことはよく知られています。他のノーマリゼーションの研究者と違い、彼は研究者ではなく行政官で実務家であるということが重要ではないかと思います。彼の思想は「The Principle of Normalization」として1976年に社会福祉局の専門職の機関誌にその論文が登載されています。当時は何気なく頂いた論文集ですが、この論文を中園康夫先生が1981年に四国学院大学の紀要にまとめました。これが日本におけるノーマリゼーション思想を初めて正確に伝えた論文だと思います。彼の思想は障害者の親の会とともに活動していく中で、かたち作られそれが結実したのが、俗に言う59年法です。論文自体は1976年ですが、その思想を具現化した法律は、それ以前の17年前です。その法律を解説しノーマリゼーションについて触れた論文が1969年になりますが、彼はやはり実践家です。



運河も凍るコペンハーゲンの下宿周辺

「ノーマリゼーションの原理それ自体は、障害者一ここでは、精神遅滞児・者も他の市民と同じ権利と義務を持つべきである、ということの他は何も表していない。ノーマリゼーションは、精神遅滞児・者をいわゆるノーマルな人にすることを目的としているのではなく、その障害とともに受容することであり、彼らにノーマルな生活条件を提供することである。すなわち彼らが最大限に発達できるよう、障害者個人のニードに合った処遇とか教育とか訓練とかを含む、他の市民に与えられているのと同じ条件を彼らに提供することを意味している。」

この定義は有名ですが、その骨子は、平等ということである。他の人々と違ひがないのであるから、義務も権利も同等であり、また障害があることによりその能力が生かし切れないのであれば、必要な教育やサービスを受ける権利があり、そして仕事をし自立する、そのためには必要な手段として、彼は早くから住居、仕事、余暇の重要性を指摘しています。

障害を受容し、他の人と同じように自立し豊かな生活を送る。バンク=ミッケルセンは、このノーマリゼーションがなぜデンマークで発展してきたか、と問われたときに、国民一人ひとりに平等性や権利性を意識することが強いということをあげていると、聞いています。

デンマークという国は一般的には豊かな国というイメージがあります。かつて友人の義父の好物の食事の内容を聞いた時、驚いたことがあります。その食事は、ライ麦のパンの上にラードを塗り塩を振りかけて食べるという。健康ブーム真っ只中の現代の日本人には考えられないような食事ですが、その時は私も友人も驚いてしました。義父は寒い北ユトランド半島出身なのでそのような食事になったのかもしれません。デンマークは歴史的には貧しく、その為お互いに支えあうということが根づいているのではないか、その典型が農業組合の発展なのでしょう。デンマーク人はつましく生活をし、外食等はありませんまいですし、ブランドの服やバックで着飾るというようなことはしない、というのが私のデンマーク人の印象です。

そしてバンク=ミッケルセンは、ナチスドイツがデンマークに侵攻した時、レジスタンス運動に身を投じ収容所に収容されます。戦後彼が社会事業省に職を得て、知的障害者の担当になった時、施設を訪れ、その実態に衝撃を受けたと聞いています。自由のない生活、人間の尊厳を否定された人々。そこには彼が戦中に体験した収容所そのものがあった。この彼の体験がノーマリゼーションへの道につながっていったのではないかと考えています。

かつてデンマークの福祉施設を訪れた日本の福祉関係者が、質問した時に同席したことがあります。「施設の収容者同士が結婚を希望した時にはどのように対応するのか」と、日本人はあまり意識していないようでしたが、質問を受けたデンマークの施設職員は、「え?」という感じでした。デンマークでは、当事者の意思を尊重することが当たり前ですが、日本ではそうでない。この時私は、この意識の隔たりの大きさは一朝一夕には解決できないように感じました。障害者差別解消法、〇〇支援法がなければいけない国とは寂しい限りです。バンク=ミッケルセンは障害者のための法律を特別に作るのではなく、障害のあるなしに関係のない包括的な法律であるべきだと強調しています。日本で見られる障害者のための特別のTV番組など、人道主義的で誰もが批判できない感じですが、これさえも私はうさん臭く感じてしまうのは、70年代に学生時代を過ごした残滓でしょうか。



デンマークで最初の大規模知的障害者施設
フィラデルフィア・コロニー

食事の写真が映し出すもの

大正大学心理社会学部

長谷川智子
文学部 1989年卒

皆さんは食べ物を選択するとき、どのようなことを意識するでしょうか。「夜には糖質を控えよう」、「最近ビタミン不足だから野菜ジュースを飲もう」あるいは「今日だけはごほうびにケーキを食べよう」などなど、普段は健康を意識した食べ物をできるだけ選択しようとする一方、ときにはその瓶(たが)をはずし…と自分なりの栄養に関する知識をベースに状況に応じて調整するといった方も多いと思います。

私は発達心理学を専門としていますが、この20年食行動に関する研究をおこなっています。その中で今回は食事写真法を使った研究のこぼれ話を紹介します。写真法とは、調査協力者に1日のうちに飲食した食べ物、飲み物をすべて撮影していただき、そこから食の有り様を探求する方法です。従来は、写真に撮影された食べ物の重量をより正確に推定することにより、その人が摂取した栄養素を算出して栄養指導に用いるために研究されることが多い手法でした。私自身も当初は栄養バランスを参考程度に用いようかと思いながら、データ収集を始めましたが、実際に撮影された日常の食事写真を前にしたとき、その多様さに驚かされました。これまで、中学生、大学生、幼児をもつ母親に対し調査をしてきましたが、どの年代でも私が想像していた「食事」とは異なる状況が多く映し出されています。

その一例として、次の2枚の写真をご覧下さい。いずれも大学生の食事です。**写真1**は画像からも明らかなように駅での食事であり、摂取時刻も昼食というには大幅に遅い時間帯といえるでしょう。



写真1 16:20に駅のホームで食べた昼食(男子)

写真2はアルバイト帰りにコンビニエンスストアに寄って食べたいものを寄せ集めたような「塩パン」「ドーナツ」「おでん」という構成です。これを見になった方の多くは、「今時の若い者は、まったく…と思われたかも知れません。



写真2 21:30に自宅で食べた夕食(女子)

しかしながら、個人の食物選択は、個人の好みだけで行われるのではなく、数々の社会的要因が影響しています。例えば、ファストフード店やファミリーレストランなどの外食、コンビニエンスストアや惣菜店などの中食(なかしょく)(購入した食べ物を職場や家に持ちかえって食べる食事)等、食品産業が発展したことにより内食(うちしょく)(家で調理をして食べる食事)以外の選択肢が多くなったこと、我々の時代には遊ぶお金ほしさにアルバイトをしている学生が多かったのに対して、今の学生は学費や家計を助けるためなど生活のためのアルバイトを深夜に及ぶまでせざるを得ない者も多い上に、大学での学業もハードになっており、ゆっくり食事を摂る時間すらもてないという状況も少なくありません。ここで示した食事写真は極端な人のものだけを選んだのではなく、自宅生も一人暮らしの学生もここに挙げた写真の食事と何ら変わらないものがたくさんありました。私のこれまでの研究では、いわゆる栄養以外に、写真が映し出す食器の代用品の使用(例:ざるそばを調理器具のザルに入れて出すなど)、料理の配置が伝統的なものか(特にご飯と汁物の配置)など様々な要因をひたすら数え上げ変数化し、そこから食の簡便化について論じてきました。

この3月に『若者たちの食卓:自己、家族、格差、そして社会』をナカニシヤ出版から上梓しました(外山紀子・長谷川智子・佐藤康一郎編)。こぼれ話の中で宣伝をして恐縮ですが、この書籍の中では、食写真からみえる大学生の日常だけでなく、大学生が生まれた時代、さらに親世代が生まれ育った時代の違いも比較しつつ、心理学的な視点のみならず、社会学や経営学的な視点からも若者たちの食卓に影響をもたらす要因について各領域の研究者にも論じていただきました。これまでの食事写真が取りあげられた書籍では、「今の家族の食卓はこんなにもヒドいのだ」とだけしか訴えられておらず、学術的に研究したものはほとんど無かったかと思います。ご興味をお持ちくださった方は是非ご一読いただけすると幸甚に存じます。

個人の食卓は時代や社会を映す鏡…食研究をすればするほどその魅力にひきこまれている今日この頃です。

アメリカだより(3)

黒坂和彦
文学部 1986年卒

『アメリカだより2』の執筆は昨年の夏の暑い最中でした。今年の冬は暖冬と言われていますが、厳しい寒さが未だ続いている。先週(2月20日)、30センチほどの積雪がありました。特に寒い日は、-10°C前後になります。以前ご紹介したとおり、幸いにも、オフィスと住居の間はわずか徒歩3分程度ですが、この距離を歩くことがつらい時もあります。寒い時期は自動車での移動も特に注意を要し、またフライトスケジュールの変更も多いので、仕事上の活動も、どうしても鈍りがちになります。春が来るのを心待ちにしている今日この頃です。

ところで、トランプさんが、大方の予想に反し大統領に就任しました。TV討論会の様子では、明らかにクリントンさんが優勢でしたので、開票の速報結果を見たときは、さすがに目を疑いました。ニューヨーク州やニュージャージー州は、民主党基盤の州で、クリントンさんの勝利でした。大統領選挙日の2016年11月8日は平日ですが、多くの企業が休みとなり、私も家内とニューヨーク市内に繰り出しました。トランプさんは市内のトランプタワー、クリントンさんは市内のヒルトンホテルにおいてましたので、街は騒然としていました。トランプ政権は目を離せない状況が続いているが、日系企業のビジネスにも関係することなので、是非、動向を注視していきたいと考えています。



大統領選当日のニューヨーク
の夜景と取材するマスコミ陣

今回、ニューヨーク稻門会について少し触れたいと思います。2015年11月に赴任後、できるだけ現地での人脈を広げたいと考え、業界の研究会、異業種の交流会、その他勉強会等、可能な範囲で参加をしてきました。稻門会も、代表幹事の方に連絡を取り、赴任後、すぐに入会しました。

ニューヨーク稻門会の設立は1970年で、現在会員数は300名程です。会員は私のような駐在員が多いのですが、留学生、こちらで起業されている方、現地の法律・会計事務所に勤務されている方も入会されています。1993年には帰国会員による、ニューヨーク稻門会東京支部も発足され、活発な活動をしているとのこと。

年間を通じて、総会、文化講演会、野球観戦会、三田会との交流会、利き酒会等、色々なイベントを開催しており、私は、これまで総会、野球観戦会、新会員歓迎会に参加しました。会員の出身学部、卒業年次もまちまちで、刺激を受けることもあります。今後も交流を深めたいと考えています。



ファンと交流する松井秀喜氏

イベントの中で特に印象的だったのは、野球観戦会です。2016年8月、巨人、ヤンキースに在籍した松井秀喜さんと会うことができました。現在、松井さんはヤンキースのGM特別アドバイザーとして、マイナーリーグ(日本でいう2軍)でコーチを務めています。稻門会でこのマイナーリーグの試合を観戦しました。松井さんは、メジャーに昇格させる選手を育成、セレクションする大事な役割を担っているようです。その松井さんが、我々の観戦する部屋に、試合の合間に寄ってくれ、家族単位で写真撮影に応じてくれました。大きい人ですが、非常に腰が低く、真摯な態度には感心しました。1月に次男が誕生されたとのこと。公私とも充実して、更にご活躍されるでしょう。



松井氏と記念撮影。妻と次女と一緒に

早稲田のグローバル化が急速に進んでいると聞いています。海外からの留学生受入れ(学部、大学院含む)は、5,000名以上(2016年度後期)で日本一です。稻門会の海外ネットワークも、グローバル化の一翼を担う組織として、早稲田で学んだ日本人以外の会員も増やすことが、今後の課題の一つのように感じています。早稲田のグローバル化が進んで、世界での認知度が、今後、一層上がるることを祈願しています。

クラス会だより

「石井康智先生を囲む会」報告 — 石井先生退職に寄せて —

川越博夫
文学部 1981年卒

「石井さん、野球の試合で脚を骨折し入院中なので実験レポートが提出できません。」「石井さん、就職は決まっているのに卒論の先生から『この卒論では…』と言われ途方にくれています。」「石井さん！」

これらは1981年心理学教室卒業の学生達から石井康智先生へ寄せられた必死の相談でした。そう当時は石井先生は心理学教室の「助手石井さん」でありいわば学生のためのコンシェルジュだったのです。

その石井先生が2017本3月に心理学教室を退職されることを知り「81年卒で石井先生に感謝の気持ちを表したい」との気運が高まりました。何しろ石井さんにお世話にならなかつた学生はひとりもいないですから…。まず「会の企画」です。「石井さん退官につき皆で集いましょう」と元学生連中に発信したら「退官は公務員言葉だからおかしい」とか「同期会と混同するのは反対だ」とか流石元早稲田の学生、いろいろと忌憚ない意見を出します。ワクワクです。

あーでもないこーでもないとやっているうちに2016年9月の土曜日の午後に大学で打ち合わせをすることになりました。そうしたら石井先生が「僕も参加してもいい？」。というわけで教授の謝恩会の企画にその当人の教授が参画することになりました。これってあり?失礼にならない?そこが石井先生たる所以ですね。

夜の参加は難しいという声に応え昼・夕方・夜という3部構成にしました。この企画は80年卒の方たちの企画のパクリです。(西本和恵先輩ごめんさい)

特筆すべきは織田(旧姓石井)純子さんのその超人的な情報収集能力の発揮です。何しろ校友会への働きかけや石井先生からの卒業生名簿などから同期74名のうち71名に案内を発信することができたのです。さすが優等純ちゃん、我らの誇り!



昼の部・ランチの後、漱石公園入口で(平尾撮影)

11月12日(土)昼にまず13名で鶴巻町のそばやさんにてランチ。写真家の平尾秀明くんに卒業式謝恩会集合写真の再編集を披露していただきました。その後散策(何とコース設定、ガイドは石井先生です。)済松寺(家光創建)、矢来公園(杉田玄白出生地)、多聞院(松井須磨子墓碑)宗參寺(山鹿素行の墓碑)漱石公園(夏目漱石終焉の地)。そして漱石生誕の牌。学び舎の近隣にこれほど多くの見学ポイントがあるとは。さらに夏目坂ふもとの小倉屋酒店。漱石の小説「硝子戸の中」に出てくるそうです。

続いて夕方の部、16時に文学部キャンパスに集合・合流し2015年9月に完成した新心理学教室へと向かいました。当時の心理学教室の面影はほとんどなくその近代的な設備の前にただただ時の流れを感じざるを得ませんでした。しかしみんな還暦が近づいているということを忘れて学生の顔になっています。

いよいよ時刻は18時、弦巻町のレストランで夜の部の開始です。集まりました30名。司会は言わずと知れた吉原(旧姓石田)みゆきさん。野木崇宏君の乾杯で石井先生に「感謝とねぎらい」を伝えます。各人からも口々に石井先生に対しての感謝が述べられました。



夜の部・フランス料理「ラ・フォンテーヌ」で(平尾撮影)

「35年の時を経て逢うことができた元学生が半数いたが、それぞれの立場で苦労してきても同じ釜の飯を食べた同窓が一気に学生時代の雰囲気をつくり渦が巻いた。「感謝感謝」と後に石井先生からメッセージを頂戴しました。

フィナーレは何といっても庄司珠緒くんの発声による「都の西北」の大合唱と石井先生へのエール、大変見事でした。井上聰君の歌唱誘導にも感謝です。

石井康智先生、我々が初めて聴講する石井先生の講義が先生の最終講義であり、またその日が先生の文学部入試の日と同じ2月25日であるということを忘れる事はないでしょう。石井先生の早稲田のA(アルファ)でありΩ(オメガ)の日です。

今はもうおりませんが私の伴侶の同期旧姓伊東桂とともに石井康智先生にこれまでのご厚誼を深く感謝申し上げ、先生の今後の益々のご発展・ご活躍を心よりご祈念申し上げます。

戸山キャンパス近況

記念会堂が新しい多機能型 スポーツアリーナへ —2019年3月竣工—

石井康智
文学部 1970年卒

戸山キャンパスの記念会堂は、2015年8月より解体準備が始まり、2019年3月に多機能型スポーツアリーナとして生まれ変わる(新37号館)。

記念会堂が作られた経緯には早稲田大学のシンボルである大隈講堂が関係している。大隈講堂は1927年(昭和2年)に竣工し学内の諸行事が行われ、親しまれてきた。しかし学生が一堂に会するには十分な広さがなかったため、早稲田大学創立75周年記念事業の一環として記念会堂が建設されたのである[1957年(昭和32年)]。

写真1
旧記念会堂
(2015-3-17)



ちなみに、大隈講堂の大講堂は1121席(1階637席、2階232席、3階252席)、小講堂は300席であるが、旧記念会堂の収容人数は5,150人(式典時)と大幅な収容人数増になっていた。旧記念会堂では、1958年第3回アジア競技大会の卓球会場、1964年東京オリンピックのフェンシング会場として使用されている。また大学スポーツの主要会場として熱戦が繰り広げられてきた。人類史上初めて宇宙空間を飛んだソ連のユーリイ・ガガーリンは、「空は非常に暗かった。一方、地球は青みがかかっていた」の言葉を残しているが、1962年5月に記念会堂で「宇宙旅行の準備を！」と題した講演を行い、約14,000人の学生の熱気に包まれたと記録されている。



写真2
新記念会堂の
基礎工事が進む
(2017-3-3)

新記念会堂(仮称)は、屋上部には緑豊かな丘状広場が整備され、建物内部は、建物構造:地下2階地上4階、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造、鉄筋コンクリート造／延べ床面積:14,037m²／収容人数:6,136人(式典時)・1,824席(可動式観客席)／建物用途:多機能型スポーツアリーナとして正課授業や体育各部のホームコートとして利用する以外、入学式・卒業式等の式典、早稲田祭や校友を招いてのホームカミングデーの会場など多目的に活用することが予定されている。さらに、グループ学習室などから構成されるラーニングコモンズ、早稲田スポーツの歴史を紹介するスポーツミュージアム、一般学生が利用できるスポーツ施設も併設される予定である。

新記念会堂の名称は、建物(地下化される)は「早稲田アリーナ」、屋上広場は「戸山の丘」に決まった。



写真3
新記念会堂完成図
(早大・総合企画部)

2017年度催し物予告

○2017年度 公開講演会

坂爪一幸氏(早稲田大学教育・総合学術院教授)

タイトル:高次脳機能からみた大人の「発達障害」

日程:2017年6月24日(土)午後3時～5時

場所:早稲田大学小野記念講堂

(本部キャンパス27号館地下2階)

○2017年度 第1回教養講座

講師:山本利枝氏(千葉大学こどものこころの発達教育研究センター、臨床発達心理士・元小学校教員)

タイトル:「レジリエンスを高め、折れない心を作るには」

日程:2017年5月27日(土)午後3時～5時

会場:早大戸山キャンパス 33号館 3階 第1会議室

○2017年度 第2回教養講座

講師:長谷川智子氏(大正大学心理社会学部教授)

子どもと「食」の問題を軸にした内容

日程:2017年10月～11月の土曜日 午後3時～5時

場所:早稲田大学戸山キャンパス

○2017年度 老年学研究部会 <新会員募集中>

谷口幸一(東海大学特任教授)、所正文(立正大学教授)

テーマ:今後の活動内容について

日程:2017年5月13日(土)午後3時30分～5時30分

場所:「喫茶ルノワール」会議室 03-5292-5772

(JR高田馬場駅近く)

発行元: 早稲田大学心理学会

〒162-8644 新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部心理学教室内

電話 03-5286-3743 FAX 5286-3759

担当:石井康智

メール: waseda_shinri@yahoo.co.jp

担当:朝岡美好

書類発送元:

一般社団法人学会支援機構

〒112-0012 文京区大塚5-3-13

小石川アーバン4F

電話 03-5981-6011 FAX 5981-6012

早稲田大学心理学会ホームページ :

<http://www.waseda.jp/assoc-wpa/>